

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	3370106084		
法人名	医療法人青木内科小児科医院		
事業所名	グループホーム あいの里シルバーマイツ		
所在地	岡山県岡山市北区今5丁目3-25		
自己評価作成日	令和6年2月1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利法人 津高生活支援センター		
所在地	岡山市北区松尾209-1		
訪問調査日	令和 6 年	3 月	8 日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

平成16年(2004年)4月青木内科小児科医院を母体とするグループホームとして開設し今年で20年を迎えた。【生きがいの追求】【個性の尊重】を運営方針とし、青木内科小児科医院はもとよりあいの里クリニックあいの里クリニック歯科との医療連携を密にし、医療面での安心を提供し開設当初より地域の中の一員として、公園の草取りをはじめ、各種行事にも参加してきた。また食事作りにも力を入れ、出来る事を出来る人にをモットーにみんなで食事作りを行い、法人の各専門職との連携で皆様の体調管理を徹底している。ご家族様との絆を大切に【笑福】[家族通信]をはじめホームページやライン等で皆様の日常をお届けしている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

永年のグループホームの運営に携わった経験から得た認知症や介護に対するノウハウを活かし、入居者への支援方法選定や声かけをしています。自立支援の考えを大事にしており入居者の出来る事は時間がかかっても出来るだけできるように入居者の意向に添うような支援をしています。介護計画作成の土台作りを担当者制にしており現状に沿った計画をチームで行いチームワーク向上にも努めています。開設以来地域との連携も大切にしておりコロナ禍の今でも付き合いは続いている様子です。また母体が医療法人であることと今まで培われた介護面のノウハウも合わせて医療、介護両面からのサポートが家族、職員の安心に繋がっている様子が窺えます。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	長年勤務している職員は、今までの中で研修等を通し、共有実践出来ていると思うが、人材不足の折(派遣・パート職員)全員が共有実践できているとは言い難い	「個性の尊重」「生きがいの追求」を第一に考えており毎月の研修や入社時のオリエンテーションで周知に加え、都度教示することで周知、共有することに努めています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	開設以来地域の一員としてをモットーに地域とのつながりを模索してきたが、このコロナ禍で散歩や行事等もなく地域の方と接する機会がすくなく地域に発行する「シルバーメイツ便り」が唯一の架け橋になっている	現在はコロナ禍により行なえていないが、開設以来近所の草取りからホームの認知度を広めていき、ホームと地域の行事をお互いが参加することで地域との関係を深めることに努めています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等を通して地域に活かす方法を模索していたが、コロナ禍で何もできていないのが現状である		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	偶数月に開催していた運営推進会議には岡山市等の行政や町内家族等の参加が数多くあったが、このコロナ禍で開催出来ておらず書面報告にとどまり、一方通行が多かったように思う	昨年8月までは書面開催だったが、10月より以前の対面形式にもどしています。できるだけ多数の家族に参加してもらえるよう日曜に会議を行なうなど工夫しており、家族からの声をしっかり聞く姿勢が窺えます。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、毎回参加して頂き、ホームの実情やケアサービスの取り組みを伝えておりアドバイス等も頂いていたがコロナ禍で会議も開催出来ておらずコロナ対策に追われたに尽きる	現在運営推進会議は日曜開催のため、市からは参加できていない様子です。コロナ禍では市からマスクの給付などで受け取りにくいなどはあったが、現在書類を直接持って行くなどもスケジュール的に難しい様子です。	現在運営推進会議は日曜開催のため市からの参加は難しい様子ですが2回に1回、3回に1回平日に開催する、定期的に連絡するなどして市との連携強化に取り組む事に期待します。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員が講師になり、身体拘束・虐待などの研修を定期的に実践しているが、スピーチロックについては常に課題が残っているのが現状である	「身体拘束をしない」を開設以来のモットーに派遣、パート職員を含めて周知徹底しています。また職員が講師になることでより深く理解できるよう努めています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に研修を行い職員の意見を聞いたり話し合いをする場をもち、利用者の状態も常に見極めるよう注意をしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前出前講座等を使用し、研修を実施したが、他の研修と同様職員が講師となり研修の機会をもっている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、時間をとって、十分に説明を行っている。特に家族が心配している点「看取り・重度化」などについては、詳しく今までのケース等を参考にしたり、法人としての連携体制等も十分に説明をし納得して頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会が出来ない状況でなかなか家族と話しをする機会が少なかったがはがき等で意見を聞いたりメールで連絡事項の伝達時またプランの説明時に出来るだけ聞くよう努力はしている	入居者から要望があれば前向きに検討し、要望が言えない入居者はなにを望んでいるか察するよう努めています。家族とはラインを利用し適宜要望を聞ける体制を整えています。	コロナ禍の事もあり家族との関係が以前のように親密になっていくような関係作りを期待します。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	申し送りノートを利用したり、手帳の提出や目標管理シートの面談時また日常のカンファ開催時等でも意見を聞くようにしている。	職員の意見は月数回行うカンファレンスで聞いたり、年2回6月と12月に行なう管理者との面談時に目標管理シートの部署目標と個人目標をまじえながら聞き取り、反映するよう努めています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の人事考課(目標管理シート)や日頃の気付きや提案等を記入する手帳の内容の把握に努めている。病児・託児施設等が完備され、子育て中の母親には、十分な環境が用意されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年2回の目標管理シート提出時の面接や気が付いたことや提案事項のノート提出等で話す機会はあるが、コロナ禍で法人内外の研修の参加は少なかった		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者同志の交流は定期的に行っていたがコロナで会う事は出来なかったが、電話やグループライン等で情報の共有や相談等をしていた。職員に関してはコロナ禍で取り組みは出来ていない		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの利用申し込み時には、本人の生活状況を把握するよう家族や利用しているサービス機関からの情報を収集して。また事前面談時には、必ず本人に来ていただいたり自宅訪問をしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の困っている事や今までのご苦労や大変さを傾聴し、当ホームの対応等について話し合いをしたり、家庭訪問等を実践している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人はもとより、家族のことも含め、その時何が必要なサービスであるかを十分に考え、法人内はもとより、他のサービス機関にも連絡をとっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援を根本に置き、お互いのできる事をしながら、支え合いながら、共に生活をしているという認識をもっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人のみならず、家族も巻き込んだケアを職員一人ひとりが日々心掛けている。コロナで面会も出来ない状態が続いたが、ラインや手紙電話等を利用して関係を保とうと努力はした		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で家族との面会もなかなか出来ない状況の中で難しかった	コロナ禍以前は家族の訪問は頻回にあったが現在は面会制限もあるため限られているのが現状です。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性について全職員で日々情報を共有し、孤立しないような席の配置や個別な関わり、ストレス発散方法の模索、家族との情報共有等をおこない、孤立しそうな状況を事前に仲裁している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族の都合で退居された方でもその後の経過を見守りながら、相談にのったり、再入居という形をとらえたケースもあり、出来るかぎりの支援に努めている		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で思いや意向を把握できるような気づきを大切に、職員全体で共有している。本人にとってどこでどのように暮らす事がいいのかカンファ時はもちろん日常でも情報を共有している	本人の意思を尊重した生活が送れるような支援、思いの把握に努めています。ある入居者は家では無気力な生活を送っていましたが、入居すると180度変化し色々やってみたり行動的になった事例があります。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時はもちろん、日々の関わりの中・会時等で把握し自分史作りを継続し、生活歴等の見直しの再発見に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送り・個人カルテ・カンファ時等日々の状態を把握するよう努めている。できることや得意な分野での支援が自信にもつながる為に日々の行動・言動から新たな発見に結び付けるよう働きかけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居前・入居後2週間・1カ月その後は3カ月とケアプランの作成を家族同席でしていたがコロナ禍で家族同席が困難で情報の共有が今ひとつだった	ケアプランの土台を担当の職員が作成することで個々のスキルアップや責任感、知識の向上にも寄与しています。またケアプラン作成の一端を個々の職員が担う事でチームワーク向上にも努めている様子が窺えます。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	カルテに、食事・排泄・日々の様子や本人の言葉・周辺症状への対応等を記入している。情報の収集と共有に努め、介護計画に活かせるような取り組みも行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍で家族との面会もなかなか出来ない状況で外出や行事等の中止もあり、とにかくコロナ対策に追われ柔軟な支援が困難であった		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	公園の草取り地域の行事等コロナで参加出来ず地域資源等との協働は困難であった		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望・もしくは本人の病状等にあった適切なかかりつけ医を家族と相談して決めている。家族の協力を得ながら、かかりつけ医とも情報の共有を図っている。	入居時に青木内科が運営していることを説明しているため自然とかかりつけ医は青木内科になり、現在は月1回の往診がある様子です。日赤病院や市民病院などの病院受診は家族に協力を依頼しています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	母体である青木内科小児科医院と、日頃の健康管理や医療面での相談・助言・対応を行っている。また体調の変化や異常は素早く看護師に報告し、早期発見・早期治療に結び付けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	サマリーをはじめ、出来るだけ詳しい情報を伝達している。入院時の付き添いをはじめ、入院中も出来る限りの面会と関係者との情報の交換や家族との連携を取り、一日も早い退院をアプローチしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の契約時に文書に基づき説明を行い、事業所で出来ること等を話し、意向の確認を行っている。突発的な急変を除き、入院から重度化・終末期を迎えた方が多く、医療的措置の必要な方が大半だった。	母体が医療法人ということもあり本人や家族と話し合いを行い青木内科へ入院することが多い現状です。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な研修を行っているが、人出不足で全職員が把握しているとは言い難い。救急車利用チェックシートで急変時の家族の思い等も把握している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の火災時の避難訓練に加え水害等の訓練も取り入れている。コロナが落ち着いたら地域との協力体制の構築も急がれる	被災時を考慮し1階に重度の入居者を集めて避難しやすい体制を整えています。また年に2回火災想定、1回地震想定、1回水害想定で避難訓練を行っており、車椅子の台数確保やヘルメットを購入するなどしています。	災害は昼夜関係なくも起こる可能性があるため夜間想定訓練に期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの生活歴や性格を把握するとともに人格を尊重した声かけや対応を心掛けている。	一人ひとりの生活歴や関係性を考慮した上での声かけや対応を心がけており、同じ入居者に対しても職員によって声かけの仕方をかえている様子です。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者に合わせた声掛けや対応で選択肢を用意し、それぞれに合わせて希望や自己決定が出来るよう場面を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れは大体決めているが、その中でも、起床時間・臥床時間・食事の時間・入浴・レクや居室での一人時間等個別性を考えた支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	汚れや身の回りの清潔には、常に気を配り、家族の協力を得ながら、その人らしさを尊重し、身だしなみや清潔への支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その人の能力に応じて、できることを一緒に行うことをモットーにしている。朝・昼・夕食や手作りおやつ等の準備片づけ等を一緒に行っている。	食事は職員が買い物へ行き、出来るところは手伝ってもらいながら入居者と一緒に作る体制です。以前は買い物も入居者と一緒に行っていたが現在はコロナやコロナ禍による機能低下により難しい様子です。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が、それぞれの階におり、栄養面での支援は十分できている。医療との連携が必要な方の栄養バランス・食事形態・水分摂取量の確保の方法等あらゆる支援を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの状態に合わせて毎食後・起床時・就寝時に見守りや声掛けで対応したり、出来ない方についても同様にケアを行っている。毎週法人内の歯科から医師・歯科衛生士の訪問があり、連携を取っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をつけそれぞれの排泄パターンを把握している。自尊心には、十分配慮する声かけや周囲に対する気遣い等にも配慮を行い、各人に応じたおむつ類の使用の検討を常に行っている。トイレでの排泄を基本とし、最後まで自立に向けた支援を行っている。	一人ひとりの排泄パターンによりパットの有無や選定を行なっています。夜間も入居者に合わせてトイレ誘導やベッド上でパット交換をしています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表を利用し、各人の排便のパターンを把握している。薬に依存せず、食事や水分での摂取や毎日の運動や体操等で自然の排便をこころがけている。また下剤等を使用している人は、医師や看護師と連携をとり、その人に合わせた方法を工夫している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	原則は毎日入浴としており毎日入浴している人もいますが、週3回は入浴している。「なるべく本人の意向にそうように入浴日や入浴時間等をその日の気分や体調等も考慮し決めている。	週3回は入浴をしており、拒否されても声かけする職員をかえたり、日時をかえたりして対応しています。また自立で更衣から身体の隅々まで丁寧に洗う入居者にも1時間時間を確保して自立支援にも努めています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や表情・気分によって自由に休息できるよう配慮している。ベッドもADLにに応じて対応したり、安眠できやすい温度管理等の環境を設定している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の目的や副作用については、個人別カルテに貼付したり、お薬手帳を活用している。薬はステーションに保管し、その都度名前・日付け等の確認を行い本人に手渡し、最後まで確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除・洗濯・裁縫・料理等生活歴や好みを生かした場面を提供し、その都度感謝の言葉を伝えることで満足感を得られるよう支援している。コロナ禍で外出が難しく気分転換も限られた		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で家族との面会もオンライン面会であり、外部との接触が難しかった。対面面会も開始したが、制限付きであり、今までのような状態にはまだ程遠い	まだコロナ禍が完全に終わったわけではないので家族との食事など以前のようにはいかない様子です。コロナ禍でも付き合いのある散髪屋さんに営業開始前に散髪をお願いするなどの工夫が窺えます。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にお金は持っていないが、祭りや遠足時等では、個別にお金を渡して払ったりする機会も設けていたが、今回はコロナ禍で外出も皆無であった		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話で自由に話されている方もおられるが、家族からの電話に出て話されたり、手紙をもらって大切にされている方もおられる		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感が感じられる壁面を職員と入居者とで毎月作成しているベランダや畑に花や作物を作っており季節感をかんじて頂くようにしている	入居者の特徴により席の配置も考慮しています。また季節折々の行事では、例えばお雛様の人形を作ったりして共用部分に飾って季節感を感じられるように努めています。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自らが、気の合った人の側に移動したりお互いの部屋へいたり、している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	新品ではなく使い慣れたものを持ってきていただくように協力をお願いしている。くつろげるよう本人に合わせてソファ等の持ち込みや居室を花や写真で飾ったり、工夫を凝らしている方もみられる。	居室は基本的には使い慣れたものを持ってきて頂き使用してもらっていますが、動線の確保や事故のリスクがあるものに関しては配置の場所を工夫するなどして対応しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体が、バリアフリーになっており、歩行の不安定な方も安心して過ごしていただけるよう配慮がされている。ADLにあわせて浴室の手すりの位置を変えたり、できることを工夫改善している。		